

賀川豊彦の終末論

波勢邦生

論文要旨

賀川豊彦研究は、彼の死後、1960年以降の全集刊行によって開始したが、賀川の戦後について、また神学思想、とくに終末論に関わる研究は僅少である。それゆえ本研究は「賀川豊彦の終末論」と題し、彼の瑕瑾「差別発言・戦争協力・天皇制礼賛」への回答も含めて、彼の神学思想を明らかにする。とくに終末論の観点から彼の思想のユニークさが浮き彫りになるがゆえに、戦後から死没までの著作に着目し、晩年の主著『宇宙の目的』とコラム群『不尽油壺』を分析する。

序論においては、本研究の位置づけを示し、研究史を補完するべく、2010年代以降の神学研究を一覧し、教義学としての終末論について述べる。次に、便宜上、賀川豊彦の生涯の区分を示して、後期・賀川を扱う理由を述べる。その上で、資料と方法について、とくに全集問題について適示する。

第一章では「賀川豊彦の神学」を扱い、とくに教義学的な語彙を析出し、その全体像を明らかにする。天国と天の父は、賀川においては教会やキリスト教徒に限定されない広がりを持つ語彙である。また賀川の神は、労働する父子神である。人々は、その神の事業への参与、贖罪愛への献身によって、三位一体論的な超越・内在・表現する「意識と経験」を得て、それが協同化することで社会変革が可能となる。しかし、その批判機能は戦時下日本においては発揮されなかった。なぜなら賀川思想に「贖罪愛の序列と進化」ともいうべき階層構造があったからである。この階層構造ゆえに、賀川は時代の制約の中で差別発言を行い、戦争に協力し、戦後も天皇を敬愛した。

賀川にとってキリスト教は、罪に破れた人間を再創造（創造・保存・修繕）してくれる宇宙の心である。その心に出会い救われた者は、苦と罪と悪の問題を修繕するために立ち上がる宇宙宗教の徒となって贖罪愛のために献身するようになる。賀川におけるキリスト教的救済は、この形式を進化論と贖罪愛のための殉教によって強化することで、批判的機能を持ち得なかった。それが賀川豊彦の瑕瑾「天皇制・差別発言・戦争協力」の原因である。

しかし、この贖罪愛の序列と進化の中で、賀川は人々を「意識と経験」へと招く。招かれた人々の下座奉仕が、神の国を拡大していくからである。贖罪愛の序列と進化は、まさしく賀川の世界観にとって、歴史を将来、未来、終末へと前進させていく力であった。その中心が、イエス・キリストの十字架への献身である。そして十字

架は、生命に内在する目的論的力、エンテレキーの表れでもあった。

第二章は「終末における聖霊の力」を扱う。まず賀川の終末論の由来としてシュヴァイツァー摂取について一瞥した。賀川はシュヴァイツァーを咀嚼・消化した上で「進行的終末論」を唱えて神秘家として歩んだ。具体的にいえば、賀川は進化した意識の力として予言と幻視を考え、それは信仰共同体においても共有されていた。それは従来の賀川解釈に揺らぎをもたらす。なぜなら文学的表現に過ぎない記述が、幻視の現実描写の可能性があるからである。

賀川は、終末における聖霊の力「霊魂力」を想定している。その内実に永遠のいのち、死など、彼の個人的終末論が展開されている。霊魂力は進行的終末論と連動しながら、人類が神的進化へと進む徴であり、賀川の神学的世界観における柱梁構造「七要素」に沿って発揮される。

七要素とは「生命、力、成長、変化、選択、方法、目的」である。賀川において七要素は、自然哲学的な表現であり、宗教的には聖霊の別名ともいえる。

終末における聖霊の力「霊魂力」は「七要素」によって社会、宇宙を包摂し、100年後の日本の姿、または黙示録における新しいエルサレムを理想的な田園都市として解釈させた。イエスの「意識と経験」を経て、贖罪愛に挺身する賀川は、終末における聖霊の力「霊魂力」によって未来を予言・幻視して希望へと前進し続けた。

第三章は「賀川豊彦の宇宙」として賀川晩年の主著『宇宙の目的』、コラム群「不尽油壺」を、とくに「意識と宇宙」の観点から読解した。賀川は「神的進化」を想定し、それは人類の宇宙進出を含む未来である。すべき宇宙について、意識の観点から後期著作に絞って詳解した。晩年の主著『宇宙の目的』は、賀川其自然哲学であり、コラム群「不尽油壺」は自然神学的表現である。両者を補完的に読解することで、賀川が構想した宇宙進出、未完の著作の可能性が見出された。

前者『宇宙の目的』は三部構成である。第一部「自然選択の方向性」で、賀川は合目的性とエンテレキーを同一視して、自然選択が神的進化へと働くことを指摘する。その合目的性の諸法則は「七要素」と呼ばれ、進化をもたらす「意匠、根、先験的選択性」として理解される。この前提で、彼は「土＝膠質（コロイド）」に注目し、宇宙における「土」の存在と、旧約聖書の創造論が衝突しないことを控えめに示唆する。第二部「生命機構の潜在目的性」では、「生命の起源」が語られる。彼は自身の立場を「全体性生命観」と宣言する。遺伝と性別が「合目的性」に沿っており生存競争とその平衡状態に「意匠」があるという。有性生殖を重くみる賀川は、この生存競争にも純潔を持ち込んでいる。第三部では「悪の起源」が論じられる。「七要素」を大胆に展開し、人間の「意識」を解説し、心と自我の生成を示し、その先にある霊魂力が悪への対策だとする。賀川は人類と他生物の進化の可能性を過去に基づいて楽観

しながら「宇宙の究極目的」は不明であるが「宇宙意志」に導かれる「夜明け」への期待を表白する。

続くコラム群「不尽油壺」解題では、賀川其自然神学的発想を意識の観点から読解し、とくに神的進化、宇宙進出への構想が明らかにされる。それは贖罪愛による精神的進化であると同時に、宇宙規模の経済圏の構想である。しかし、それは賀川の死去によって未完の著作の可能性として提示されるに留まった。

終章では「賀川豊彦の終末論」を論じる。賀川豊彦の進行的終末論を教義学的な区分を適用して考察する。また先行研究の議論に従って、賀川の終末論の定位を試みる。まず個人的終末論である。彼にとって個々人の死は、進化の過程における必要悪であるが、贖罪愛によって立ち向かえば、それは変化として理解される。変化は、肉体から霊体への進化、永生の獲得として理解され、神の記憶に保持される。聖書的象徴である再臨と復活は、あくまで歴史内の自然現象として相対化されて解釈される。個々人の救済可否は、悪の問題として宙吊りにされたまま、やがて判明すると楽観される。

歴史的終末論、宇宙論的終末論は、賀川のいう神的進化論や進行的終末論のプロセスとして理解される。生命の神は、物質にエンテレキーと呼ばれる合目的性を与えている。このエンテレキーが、無機物から有機物、有機物から生命、生命から意識、意識から神へという神的進化の階梯を動かしている。これは霊魂力とも呼ばれ、全意識とも呼ばれる宗教と科学を統合的に把握する場であり力、歴史を貫く「七要素」、贖罪愛として顕現する。この贖罪愛が歴史を終末へと前進させていく。すなわち、贖罪愛は、個々人の内発的变化のみならず、集団と社会を変革し、やがて歴史を変え、人類や被造物世界の全体をも変えていく。「修繕の原理」と呼ばれる予定論にも似た、極めて強い力が歴史の方向性を宇宙の目的へと運び始めていく。初期の詩作「終末のラッパ聞こゆ」で示されるように、賀川思想においてキリストの再臨による破局的終末、または究極的な歴史の宇宙論的完成は、テキストからは明確に論じられない。ただし一般的な意味での物理科学的宇宙としての時間／歴史の終局、宇宙の熱的死は存在している。

教義学的な終末論の最終項目・神の栄光においては、賀川は宇宙の熱的死の果てで、意識が目覚め、神の笑顔に会うと理解している。歴史の終わりの先で、物質と精神は創造論的に相互浸透し、悪の問題に立ち向かうために贖罪愛によって再創造され、永遠と時間、超越と内在がつねに全意識において一体化する。そして、あくまで本研究の見立てに過ぎないが、究極の神人協力説ともいえるかたちで、歴史という救済過程の向こう側で、神と人がともに栄光それ自体となる。

続けて、賀川の終末論を先行研究に基づいて定位する。芦名定道の研究に沿って分類すると、本研究は「未来の事柄としての終末」を論じた。芦名の類型論は19世紀

以降の終末論の歴史的展開の要約でもあるが、賀川は倫理化した終末論から出発し、黙示文学的な終末論の再発見と、価値領域の事柄としての終末論を合成して、弁証法神学とは別の仕方で終末論を現在化した。

賀川の終末論の特徴は、神を「生命」と言い換えるほど、その統一性と相互独立性について強調した点にある。また晩年の主著『宇宙の目的』において、非人間的主体による目的成就の可能性を示唆することで宇宙における人間の脱中心化、奉仕の道を開いた点もある。加えて人間のみならず抑圧された被造物との連帯可能性として解放の神学との接近を見出し得る。また、人類に与えられた神との協働者としての使命への促しとして、人類が生命の目的へといたるために宇宙において特別な地位を与えられたと理解している。まさに彼の終末論は、宗教と科学と自然の対話の場であり、自然環境を含む全体論だった。

結論として、賀川豊彦の終末論を考察する。それは「進行的終末論」である。人類は生命の神、宇宙の親心の意識に目覚めたイエス・キリストの「意識と経験」に招かれて、父子神の労働へと参与することで、贖罪愛の発露、下座奉仕による神の国形成へと献身する。それは苦・罪・悪に対抗し得る創造・保存・修繕のシステム「贖罪愛の序列と進化」への参加でもある。そこにおいて、研究史の課題としての賀川豊彦の瑕疵が生成される。同時に、そこでは「神的進化」への道程が開かれ、人類には終末における聖霊の力「霊魂力」が与えられる。霊魂力は「七要素」として神の国を拡大し、人類を宇宙の目的の直前まで導いていく。賀川は、シュヴァイツァーの徹底的終末論を咀嚼して「進行的終末論」を唱えた。

未発見の資料、分析の不足など、研究としての不備は否めないが本研究が析出した賀川豊彦のキリスト教思想のかたち、とくに終末論に関しての見立ては新資料の追加によっても、ある程度までは成立すると考えられる。